

# 序

少子高齢化は、平均寿命が延びる一方で出生率が減少し、併せて労働人口も減少するというだけの単純な問題ではない。保健医療福祉分野に目を向けると、治療や介護にかかる費用が高<sup>かさ</sup>むだけでなく、共働き世代の増加に伴い、家庭での要介護者の介護の担い手不足から施設に長期入所せざるをえないという構図がいつの間にかできあがっている。この流れを放置しておく、家族のつながりが薄れるだけでなく、国の財源がいずれ底をつくことは容易に想像のつくことである。

この社会現象を打破するべく、国も「施設から在宅へ」「治療・ケアから予防へ」など医療費の削減をめざす政策を推し進めている。なかでも、われわれセラピストは「高齢者および障害者をどのように地域で支えていくか」というテーマを強く求められるようになった。つまり、地域リハビリテーションには、対象者の機能的な改善、活動・参加レベルへの結びつきを図るとともに、地域（在宅）で安心してその人らしい暮らしができるように支援し、地域住民がともに暮らす体制づくりをするという視点が重要なのである。

第1版では地域理学療法をベースに章立てをしていたが、昨今の社会現象から考えると理学療法だけでは地域の課題をすべて反映することができなかつたため、第2版では作業療法の視点も充実させる運びとなった。第2版も第1版同様に、ガイドラインに準拠したうえで、世界的かつ最先端の視野で地域リハビリテーションを考えることのできる構成となっている。また、診療報酬改定にも対応している。そこで、本書を理解していただくために第1版との違いも踏まえて第2版の構成を紹介したい。

第1章では、基本方針は第1版同様に世界的な視野で地域を捉える構成にしているが、理学療法と作業療法の専門性の広がりを見通しも含めて論述している。第2章では、理学療法と作業療法の基盤となる関連制度と関連法規についてとり上げている。第3章と第4章も、第1版同様に屋内外の住環境の評価や整備をリスクも含めて考える構成になっている。第5章は新たに導入した章であるが、すべての実践の基盤となる「地域リハビリテーションプロセス」について論述している。第6章は、第5章の「地域リハビリテーションプロセス」を実践的に捉えた章であり、地域理学療法・地域作業療法ともに事例を提示することで具体的に臨床をイメージしやすい展開となっている。第7章は、第1版でも好評だった文献レビューをとり入れた章になるが、「転倒予防」、「サルコペニアと介護予防」、「認知症予防」に

加えて「作業を用いた健康への貢献」の4領域をとり上げ、文献レビューを提示することで初学者が「予防」を科学的に学べる構成としている。第8章では、地域包括ケア、地域での連携、ケアマネジメントなど、重要性がクローズアップされてきている行政療法士の役割機能について学ぶことができる。第9章では、過去の災害の教訓から国レベルで防災と災害支援活動、そして人材育成（防災士など）が行われていることから、療法士の視点から防災と災害支援について考える機会をもった。そして、第10章は、「地域での起業と社会貢献」と題し、近年の重要な社会的課題である「セラピストは高齢者および障害者をどのように地域で支えていくか」というテーマに対して「起業」の立場から地域リハビリテーションの可能性を模索した。

以上のことから、本書は地域リハビリテーションを新しい視点から捉えた、新時代にふさわしい教科書であるといえる。本書を有効に役立てていただければ幸いである。

2019年2月

重森 健太  
横井賀津志